

## トニ・モリスンの小説における技法

著者	?橋 晶子
号	7
学位授与番号	107
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/44035">http://hdl.handle.net/10097/44035</a>

たか はし あき こ  
高 橋 晶 子

学位の種類 博士（国際文化）

学位記番号 国博 第 107 号

学位授与年月日 平成21年 3 月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）  
国際文化言語論専攻

学位論文題目 トニ・モリスンの小説における技法

論文審査委員 （主査）

教授 鈴木 美津子

教授 石 幡 直 樹

教授 市 川 真理子

教授 杉 浦 謙 介

教授 島 途 健 一

教授 両 角 千江子（宮城学院女子大学）

## 論文内容の要旨

### 1. 研究の目的とその背景

現代アメリカを代表する作家トニ・モリスン（Toni Morrison, 1931-）の小説の特色は、豊かな重層性にある。モリスンの作品には、民話やお伽話の枠組み、複雑な語りの構造、開かれた結末の採用、超自然的要素の導入など、実にさまざまな実験的手法が駆使されている。その結果、マーク・C・コナー（Marc C. Conner）などが指摘しているように、読者は常に小説への参加を求められ、そして最終的解釈が委ねられるということになる（Conner, Introduction, *The Aesthetics of Toni Morrison*, xxiii）。さらにはモリスンの文学的体験も、豊饒な重層性に貢献している。彼女自身はネリー・マッケイ（Nellie McKay）とのインタビューにおいて、あたかも西欧文化から生まれた比較文学的研究方法を牽制めいた形で否定するかのよう、「私は、ジェイムズ・ジョイスには似ていない……フォークナーにも似ていない」（*Conversations with Toni Morrison*, 152）と述べているが、ギリシア、ラテンの古典文学、ウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897-

1962)、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941)、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) などから、多大な文学的影響を受けていることは紛れもない事実である (Harold Bloom, Introduction, *Modern Critical Views: Toni Morrison*, 3-5)。またアフリカ系アメリカ人作家として、自己の民族の歴史、文化を重視しており、アフリカ系アメリカ人の間に伝わる口承伝承や民話、神話の影響も強く受けている。モリスン自身「小説は政治的であると同時に美しいものであるべきである」 (“Rootedness” in *Black Women Writers (1950-1980)*, 345) と述べ、芸術と政治の不可分な関係を主張する。もちろんモリスンは、自らの政治思想を作品にあからさまに生の形で盛り込むことはしない。モリスン自身が、書くことは想像の産物であると述べていることから明らかなように、彼女は自分自身の知識や経験の外にある世界を、想像力を働かせて創造し、非常に重層的で華麗な言語空間を描き出すことに力点を置いている。

これまでモリスン文学の研究の中心となってきたのは、彼女の作品の中にアフリカ系アメリカ人の歴史や文化、伝統がいかに盛り込まれているかを探る試みであった。しかしこのような研究方法は、場合によっては政治的になり過ぎ、またややもすれば小説本来の持つ面白さや美しさ、すなわち豊かな文学性を見逃しがちであった。また同時代のアフリカ系アメリカ人女性作家アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) やポール・マーシャル (Paule Marshall, 1929-) などとの影響関係や共通点を明らかにする比較研究も多々なされている。このように、アフリカ系アメリカ文学という枠組みの中で語られることの多かったモリスンの文学は、その後多様な批評の場へと広がりを見せ、今日では、語りの構造分析や文体についての研究、精神分析批評や脱構築、フェミニズム批評といった現代批評理論を用いた研究も盛んにおこなわれている。

本論文の目的は、モリスンの第3作目の小説である『ソロモンの歌』 (*Song of Solomon*, 1977)、第4作目の『タール・ベイベー』 (*Tar Baby*, 1981)、そして第5作目の小説である『ベラヴィッド』 (*Beloved*, 1987) を取り上げ、各小説に描かれている身体描写や自然描写を分析し、その表象の背後に潜む重層的な意味を考察することである。モリスンの小説における身体描写と自然描写の持つ意味と担う機能とについては、時に指摘されることはあっても、あまり包括的なものになっているとは言えない。そのため身体や自然を表現する比喻や、言葉に込められた重層的な意味を検証することは、モリスン文学の理解を深めるために意味のあることのように思われる。

## 2. 各章の内容

第1章では『ソロモンの歌』における身体描写と自然描写に着目し、表象の意味やその機能を探る。この作品でモリスンは、アフリカ系アメリカ人の間に伝わる「空飛ぶアフリカ人」の民話を枠組みに用いている。『ソロモンの歌』は、2部構成となっており、第1部ではミシガン州のある小さな町でのミルクマン・デッド (Milkman Dead) の誕生から31歳までの「飛べない」人生が描か

れている。第2部では、彼が南部への旅によって自らのルーツを知り、自己認識に達する姿、すなわち「飛翔」までが描かれる。彼は南部の大自然の中で、「飛ぶこと」の意味が、真の自己を獲得することだと知る。

第1章第1節ではミルクマンの父方の叔母であるパイロット（Pilate）と、パイロットの孫であり、ミルクマンの恋人となるヘイガー（Hager）を取り上げ、2人の身体的特徴と身体表象を分析し、その意味をミルクマンとの関わりから探る。ミルクマンの人格形成と成長には、さまざまな人間が関わっている。そのなかでもこの2人の女性は、ミルクマンの誕生や初めての性的体験といった彼の人生の節目において、非常に大きな役割を果たしている。

パイロットの身体的特徴は、臍が無いこと、背が「高くて黒い木のように見える」こと、男性のような姿勢をしていることなどである。臍が無いという身体的特徴はパイロットにとって、肯定的で積極的な意味を持つ。なぜなら、臍がないことでパイロットは地域社会から疎外されており、結果的に他者からの支配を免れ、アメリカ中産階級の社会規範や既成概念、さらには、宗教（キリスト教）といったものにも全く縛られることはなく、自分の意思のみに従って生きていくことができたからである。「高くて黒い木のように見える」パイロットの姿は、全世界の中心で、大地にしっかりと根を下ろした大きな一本の木のようにあり、自分の庇護の元に子や孫を扶養し、逞しく生きる彼女の生き方を示す。パイロットはいつも手編みの海軍の帽子をかぶっているが、それは彼女の名前が水先案内人を意味するパイロット（Pilot）と同じ発音であることと呼応している。その名の通り、彼女はミルクマンの出生を導き、父メイコン・デッド（Macon Dead）の絶対的な権力のもとで萎縮しながら生きるミルクマンに、家庭の安らぎや解放感を与える。さらには、彼に人生の意味を教え、先祖の歴史や共同体の民話を語る。パイロットの身体の特徴は、強い母性と生命力によってミルクマンにとって人生の水先案内人、母親的存在となるだけでなく、「母なる大地」（Mother Earth）のような存在であるということを示している。

ヘイガーについては、彼女の爪と髪に焦点をあてて考察する。ミルクマンを一瞬にして虜にするヘイガーの魅力は、彼女の非常に長い爪に象徴的に示される。彼女の長い爪は、人を誘惑する女や邪悪な悪魔を示唆する。また、手仕事が可能ほど長い爪は、彼女が徹底的に甘やかされて養育されていることの証しにもなる。虚栄心と自負心に満ちたヘイガーは、ミルクマンが10数年に渡る恋人関係を終わらせようとしても、それを受け入れることが出来ず、結果的に狂気に陥ってしまう。

ヘイガーのもう一つの身体的特徴として描かれているのは、太く羊毛のような豊かな髪である。ヘイガーは、いかにもアフリカ系アメリカ人らしい自分の髪を嫌い、ヨーロッパ的（白人的）な美にあこがれ、自己を白人の外見に近づけようと必死になる。なぜならミルクマンの新しいガールフレンドは、ヘイガーの髪とは対照的に絹のように長く、つややかな、赤褐色の髪を持つ女性だからである。ミルクマンのヨーロッパ的なブルジョア社会の美の基準にヘイガーは囚われ、本来の自己

の美しさを否定し始める。ヘイガーが本来持つアフリカ的な美しさは、祖先たちからパイロット、母リーバ（Reba）を経て彼女へと繋がってきたものである。ヘイガーはそれを否定し、中産階級的物質主義に囚われているミルクマンを愛し、彼の価値観に合わせようとして結果的に破滅する。ミルクマンは南部への旅により、自己変革を遂げる。旅から戻った彼は、ヘイガーに対する自分の態度がいかに自己中心的であったかを認識し、自己の行動を恥じる。パイロットから手渡された箱に入ったヘイガーの遺髪を、ミルクマンは自己の罪の証と認識する。アフリカ的なものを拒否したヘイガーの身体を通して、モリスンは、祖先から繋がってきたアフリカ的な美を否定し、受け継ぐことを拒絶することの愚かしさを明らかにしたのである。

第1章第2節では、主人公ミルクマンの成長と飛翔の実現に必要なものとなっている、彼の自然体験に着目する。モリスンが描くのは、ミルクマンを受け入れ、生まれ変わらせる圧倒的な包容力、再生力を持った大自然である。西アフリカから奴隷としてアメリカに連れて来られ、妻子を残して再びアフリカへと飛び去ったと言われるソロモン（Solomon）を曾祖父に持つミルクマンは、実にさまざまに「飛ぶ」とことに関連付けて描かれている。ミルクマンはアメリカ南部で自然を実際に体験するまで、自然に対して無関心、無理解である。彼にとって多種多様な木々や野原の風景は、緑色一色の退屈なものとしか感じられない。ミルクマンの自然への無関心、無理解は、彼の自己中心的で他人に無関心な性格を象徴的に示している。南部での自然を体験することでミルクマンは、自分のこれまで生き方がいかに虚しいものであったかを痛感し、主体性を持つ人間へと生まれ変わる。つまり、大自然はミルクマンの自己変革の場となるのである。そして夜の狩猟に参加することで、ミルクマンは大地と一体化することを学ぶ。これは、ミルクマンの不完全な自己が、自然を体験することによって、全体性を回復したことを示している。そして飛ぶこととは、現実からの逃避ではなく、確固たる自己を持つことであると理解し、ミルクマンは大空への飛翔を実現する。

第2章では『タール・ベイビー』を取り上げる。『タール・ベイビー』には、アフリカ系アメリカ人でヨーロッパに住んでいる女性、フロリダ出身のアフリカ系アメリカ人の男性、西インド諸島に住む引退した白人のアメリカ人実業家夫妻、アフリカ系アメリカ人でフィラデルフィア出身の執事と料理人夫婦などが登場する。その結果、実にさまざまな人間関係が生じ、そしてそこから生まれる多様な状況、葛藤が描かれている。モリスンは、この多様な登場人物達を駆使して、1980年代のアメリカ合衆国、西インド諸島における人種、階級、ジェンダーの関係を探っている。

第2章第1節では、パリ在住の知的なアフリカ系アメリカ人女性ジャディーン（Jadine Childs）とフロリダ出身のアフリカ系アメリカ人ウィリアム・グリーン、通称サン（Son, William Green）との関係に着目し、ジャディーンが自己の全体性を回復し、自己を再確認するさまを、サンの身体描写に焦点を当てて考察する。サンの身体的特徴は、彼のルーツを象徴するドレッド・ヘア、サバンナがたたえられている眼、驚のくちばしの形をしている鼻にある。ジャディーンは、白人ヴァレ

リアン（Valerian Street）の庇護のもとパリで学び、モデルとして活躍しているため、ヨーロッパ的な価値観を持っているが、同時にルーツを持たないことによる孤独と「本物で無い感覚」を常に抱いている。サンの髪は、現代文明や白人の秩序では抑え切れない自然と、アフリカ系アメリカ人の力強さの表れであるが、ジャディーンはサンの髪を否定的に捉える。しかし徐々に、山々、サバナなどがサンの額と目の中にあると認識するようになり、彼を美しいと感じるようになる。ジャディーンはアフリカ性を表象するサンの身体を通して、アフリカ的なものが自らの内部に存在することに気付かされ、全体性を回復し、強い女性へと変わったと言える。

第2章第2節では『タール・ベイビー』における自然と人間の関係をヴァレリアン、サン、ジャディーンに的を絞って検討する。ヴァレリアン達が暮らす〈騎士の島〉の自然は擬人化されており、物語の進行役としてギリシア劇のコーラスのような役割を果たしている。たとえば、開墾のために島にやってきた労働者達に虐待された自然は狂気に陥り、怒りの叫び声をあげる。『タール・ベイビー』における自然の擬人化は、自然の視線を読者も持つことにつながり、さまざまな角度や距離から登場人物を見ることも可能にする。さらには、西欧人の自然への侵略、破壊の状況、苦しみを自然に語らせることによって、声を発することが出来なかった西アフリカから連れて来られた人々の心身の苦しみを代弁させ、さらには西インド諸島における植民地支配の過酷な歴史を象徴的に浮かび上がらせる。

ヴァレリアンは熱帯の自然の秩序を無視し、温室を建て、暑さに弱いアジサイなど、フィラデルフィアで親しんできた植物を栽培している。彼は自分の温室で、自分の欲望のままに自然を管理し、楽園を作ろうとする。しかし、彼が作り上げた楽園は崩壊し、最後には自然からの報復を受ける。一方、サンはグリーンという姓が暗示するように、ヴァレリアンとは対照的に、活力にあふれ、常に自然と一体化している人間として描かれる。船から脱走したサンが〈騎士の島〉へ流れ着いたのも、女の手のような潮によって島へと押されてきたからであり、ヴァレリアンの温室の中で蕾をつけるものの一向に咲かないシクラメンを、彼はその茎を指で打つことによって咲かせる。またサンは自然をあたかも女性のように扱い、性的含意に充ちた態度を示す。ジャディーンはヴァレリアンと類似した価値観を抱いている。また、文明に管理された自然以外は、ほとんど評価せず、自然とはあまり関わりを持とうしない。ジャディーンは西インド諸島の過剰な自然を嫌い、タールの沼地が象徴する原始的な自然、黒人性を拒否する。このようにモリスンは、『タール・ベイビー』において、白人のアメリカ人、アフリカ系アメリカ人の男性、アフリカ系アメリカ人の女性の自然に対する多様なありようを描き分けている。

第3章では『ピラヴィド』を取り上げる。この作品は、南北戦争前後を時代背景としている。主人公のセテ（Sethe）をはじめ、作中に登場する人々のほとんどが奴隷としての過去を持ち、それによる精神的・肉体的傷を負っている。この作品でモリスンは、奴隷制度の中でしか生きることが



許されず、苦悩と苦痛に命を削った奴隷とされた人々が、いかに人間性を回復していったかを描く。作品の焦点は、セテと、彼女が殺害した愛児に置かれている。セテが犯した罪、そして彼女が殺害した赤ん坊の亡霊ビラヴィド（Beloved）をめぐる、セテ自身と生き残った娘デンヴァー（Denver）、セテの奴隷時代の仲間ポールD（Paul D）、さらにはコミュニティの人々それぞれの物語が展開し、繋がりあっていく。

第3章第1節では、エイミー・デンヴァー（Amy Denver）の身体に注目する。奉公先からの逃亡途中のエイミーは、森の中で産気づいている逃亡奴隷セテと出会い、彼女の出産を助ける。エイミーは幼くして母親を亡くし、奉公先の主人に虐待され、白人でありながら黒人奴隷のように扱われるなど、セテと類似して描かれる。エイミーの腕は、精糖作業に従事させられた奴隷の苦労の象徴とも言うべき「サトウキビ」に喩えられる。これは、エイミーが白人でありながら黒人奴隷であるセテと心を通わせ、彼女を癒す役割を担うことの暗示となっている。さらにエイミーの蓬髪は彼女の活力や霊力の象徴であり、髪が示すとおり、彼女は背中に酷い傷を負って瀕死状態にあるセテと、セテの胎内に宿る新しい命を救うことになる。セテに「良い手」と言われるエイミーの手は、セテの背中の鞭打ちによる傷や足の傷、さらに心の傷を癒すために、そして出産の介助をするために活躍する。手で傷を揉むことによるエイミーの癒しは、セテにとっては激しい痛みを伴うものだが、エイミーは、生まれ変わるときは痛みを伴うものだとしてセテに教える。この苦しみを越えた先に新しい生があるという主張は、奴隷とされた人々の心身の傷の癒しと再生を主題にした『ビラヴィド』の主張とも呼応している。またセテの背中の惨烈な傷跡は死に繋がるものであったが、エイミーは傷跡に触れ、生命力にあふれた花盛りのチョークチェリーの木と名付ける。傷跡を生命力のある聖なるものへと変え、新しい命をこの世へ連れてくるエイミーの手は、彼女達を鞭打った白人達が「邪悪な手」と表わされるのと対照的である。手で邪悪なものを浄化し、名付けることで存在させるという行為から、エイミーにはある種の神格化がなされていると言える。

第3章第2節では、セテが殺害した娘の亡霊であるビラヴィドの身体に着目する。ビラヴィドがセテ達と同居することによって、非現実的な世界がセテ達の前に広がってゆく。ビラヴィドの奇妙な特徴によって作品世界は動き出し、人々は長い間とりつかれてきた過去から解放・救済され、再生を実現するのである。モリスンは『ビラヴィド』の着想を、1856年に実際に起きた逃亡奴隷による子殺し事件から得ており、その時殺害された赤ん坊について想像し、創造したのがビラヴィドである。ビラヴィドの身体および行動は大変奇妙なものであり、彼女が甦ることによって作り出される世界もまた非現実的で奇妙である。それらを分析するうえで、ミハイル・バフチン（Mikhail Bakhtin, 1895-1975）による「グロテスク・リアリズム」の概念を援用する。バフチンの定義するグロテスクは、美的概念であると同時に政治的概念でもある。モリスンも奴隷制という政治的問題を取り上げ、同時にビラヴィドを絵画的に描くことなど、『ビラヴィド』において芸術性と政治性

を両立させており、パフチンの概念に基づく分析は有効性があると考ええる。

ビラヴィド登場以前の作品世界は閉塞感に満ちたものとなっているが、彼女の登場によって大きく動き出す。ビラヴィドの身体的特徴は、「グロテスク・リアリズム」の主要な特質である格下げの機能と、アンビバレンスな特質を用いて描写される。目に見えない霊でしかなかったビラヴィドが、生身の若い女の姿となって甦ることに、格下げの機能が読み取れる。また、ビラヴィドはセテやコミュニティの人々の過去の肉体化とも考えられる。彼女は自らの肉体や行動を通して、人々が胸を奥にしまいこんだ過去を思い起こさせ、語らせるきっかけとなるからだ。そしてビラヴィドの身体描写でもっともグロテスクなのは、亡霊でありながら妊婦のような姿をして人々の前に現れることである。ビラヴィドは生死の境界を超え、微笑みながら「カーニヴァルの空間」を作り上げたのである。そこでは時間や人々の間にある距離や壁が取り払われ、人々は苦しみや抑圧から解放されるのである。妊婦のような姿のビラヴィドが胎内に宿していたのは、セテをはじめとする奴隷制度の犠牲者達の、救済され再生された人生なのである。

第4章では『ビラヴィド』に描かれる自然について考察する。その中でも「鳥」「水」そして「樹木」の描写をとりあげ、登場人物達の身体や心といかにつながっているかを考察する。

第4章第1節では「鳥」に着目する。その中でも「ハチドリ」(hummingbird)と「雄鶏」(rooster)、そしてカーディナル(cardinal)は登場人物たちと関わりを持つ存在として描かれる。自分達を捕らえにきた追っ手の姿を見たとき、セテは彼女の髪の中に嘴を突っ込んできたハチドリの羽音を聞く。花の蜜を吸うことで知られるハチドリの姿からは、セテを虐待し、身体と母性を搾取し続けた奴隷主達の姿が読み取れる。さらに髪の中に嘴を入れてくることは、ハチドリに表象される白人達の非人道的な行為によって憤怒するセテが、理性を奪われ、狂気に陥ったことをも表わす。彼女は子供達を殺害することを決意するからである。スウィート・ホーム農園で飼われていた雄鳥ミスター(Mister)は、セテの奴隷仲間であるポールDと関連づけて描かれる。ミスターの描写には2つの側面がある。一つは人間の手による特異な孵化や、不自由な足の描写、さらにその邪悪な振る舞いにみられる、ポールDの自己の不完全さの表象としての側面。もう一つはそれとは逆に、自らの生を自尊心を持って謳歌する姿であり、それは自分の人生すら自分のものではない奴隷としての自己の運命と苦悩を、ポールDの心に強烈に刻み付けることになる。ビラヴィドが森の中で見かけるカーディナルは、彼女自身の姿と重なる。その羽の赤い色は、セテに切りつけられ、血まみれになって死んだ赤ん坊の姿を思わせる。また飛んでいる鳥は魂の実体化を表わすことから、殺害された赤ん坊の魂は、ビラヴィドだけでなくカーディナルの姿にも視覚化されている。このようにさまざまに描かれる鳥だが、そのイメージの用法は『ソロモンの歌』で用いられたようなアフリカ系アメリカ人の伝統的な用法とは大きく異なる。「空飛ぶアフリカ人」の民話にみられるように、「鳥」は奴隷とされた人々の自由への強い願望の象徴とされる。しかし『ビラヴィド』におけ



る鳥は奴隷制の犠牲者を表わすと同時に、白人の姿も表わしており、モリスンがこの作品で非常に実験的な技法を用いていることがわかる。

第4章第2節では水の描写に着目する。作品の舞台オハイオ州シンシナティを「水の都市」と記述することをはじめ、オハイオ川や凍りついた運河、大雨、さらには羊水に至るまで様々な形態の水の描写がなされている。『ビラヴィド』における水の意味を探り、作品におけるその機能を探る。

セテはオハイオ川で出産するが、この川は生と死のどちらにも繋がる場として描かれる。瀕死の状態のセテの出産はまさに死と隣り合わせのものである。さらにオハイオ川は1787年に制定された北西部条例（Northwest Ordinance）によって自由州と奴隷州の境界線となったことから、逃亡奴隷にとって生と死の境界線となっていた。囚人となったポールDが体験した大雨もまた、生と死をつなぐものとなる。大雨による洪水でポールD達は脱獄し、人間らしく生きるチャンスを手に入れるからだ。またこの洪水からはノアの箱舟のイメージも想起されるが、箱舟に乗って洪水の難を逃れたノア一家に対し、ポールD達は閉じ込められた箱の中から水の中へと脱出することで生き延びる。モリスンは洪水物語の枠組みの中に、むしろ水の中のほうが命を保障するという逆転の世界を創造したのである。ビラヴィドが出現する小川は、生命の源としての水のイメージを備えたビラヴィドの誕生の場であると同時に、西アフリカの人々が渡った大西洋の航路、つまり「中間航路」（Middle Passage）の水も表わす。モリスンは、ビラヴィドは中間航路を生き延びた人々を象徴的に表わすと述べている。生と死を同時に備えたビラヴィドだからこそ、中間航路を生き延びた人々の記憶を表象するのである。ビラヴィドは自らの身体をとおしてセテ達に過去を再記憶させ、明日を生きる希望を与える。水は生と死をつなぐものとしてだけでなく、過去・現在・未来を結ぶものとして機能するのである。

第4章第3節では樹木の描写に着目する。『ビラヴィド』には、セテの背中の木をはじめ、樹木名の記述や樹木の描写が多い。しかもこれらの樹木は、登場人物の身体と直接的なつながりを持ち、作品中において極めて重要な機能を担っている。本節では、『ビラヴィド』に描かれた樹木の描写のあり方に的を絞り、樹木が作品においていかなる役割を果たしているのかを検証する。デンヴァーは家庭で得ることが出来ない安全や安心を、森の中の5本のツゲ（boxwood tree）の灌木が作る空間の中で得る。ツゲの木は男性的な木であり、5本という数から、デンヴァーが男性の手の中に包み込まれているように解釈することができる。つまり、ツゲの灌木はデンヴァーを守るだけでなく、思春期を迎えた彼女の身体的、精神的成長を助ける働きを担う。スウィート・ホーム農園に生えるスズカケ（sycamore）の巨木は、ポールDと強く関連付けられる。ポールDが「ブラザー」（Brother）と呼ぶその木は、彼が信じてきた家父長主義的な男らしさを再考する必要性を気付かせ、再定義の助けとなる存在として描かれている。ビラヴィドは小川を通してこの世に甦るとすぐ、桑の木（mulberry tree）に寄りかかって丸一昼夜眠る。桑の木はオウィディウスの（Publius

Ovidius Naso, 43 B.C.-A.D. 17) の『変身物語』(Metamorphoses, AD. 1-8)にある「ピュラモスとティスベ」(“Pyramus and Thisbe”)の悲恋物語に出てくるものが良く知られており、そこでは血のイメージに満ちたものとして描かれている。桑の木の下で眠るピラヴィドの姿は一見すると穏やかなものだが、その背景には彼女がセテに殺害される時に流れた鮮血のイメージが見え隠れしている。セテの背中にあるチョークチェリーの木(chokecherry tree)は、視覚的に強く訴えかける力を持ち、作品世界において中心となっている。チョークチェリーは実にさまざまなイメージを持つ。木は地中に根を張り、天へと伸びていくことから「世界軸」がその基本概念となる。チョークチェリーの木も、エイミーによって生命力あふれるもの描写され、母性や豊饒といった意味も読み取れる。反対に過剰な生命力を放つことにはある種の異様さが漂い、セテの濃い母性愛と子殺しという悲劇が暗示されている。また「木は人を招き、信頼できるもの」というポールDの考えどおり、チョークチェリーの木は彼をセテの元へと招き、寄り添って生きていくことを決心させる。最終的には厳しい冬を乗り越え、新芽をつけて春を迎える樹木のように、チョークチェリーの木も再生のイメージを湛えながら、2人の未来への希望と結びついてゆく。『ピラヴィド』において樹木の描写は、決して作品を彩る風景描写の一部などではない。登場人物達の身体と直接的につながりを持ち、その豊かなイメージで作品世界を彩りながら、物語の展開に大きく関わっているのである。

### 3. 結論

身体描写と自然描写には、人々の感情や性質、さらには、アフリカ系アメリカ人の過酷な歴史といった抽象的なものが具象化されている。モリスンの駆使する言葉の特徴は、まるで言葉で絵画を描いているかのようなその用い方にある。登場人物達の内面や、アフリカ系アメリカ人の歴史を、ありありと目に見えるように絵画的に描いて読者に提示するのである。モリソンは、再読に耐える作品を生み出す想像力とは、「誰もが共有できる世界と、限りなく柔軟な言語を含んでいる」(*Playing in the Dark*, xii)と指摘する。モリスンの小説の言語は「身体」「自然」そして「心」を結びつけて描いており、そこに含まれるイメージや意味をさまざまに解釈できる柔軟性を持っていることは、本論文での考察で明らかである。さらに本論文で取り上げた3つの小説のうち『ピラヴィド』においては、モリソンは奴隷制度という「過去」をも、その政治性のみを強調することなく、身体や自然の描写から自ずと浮かび上がってくるように描き、重層的な小説世界を作り上げている。そのため読者は奴隷制度とは切り離された単なる過去ではなく、現在にまで繋がる過去であることを認識し、さらに犠牲となった人々の痛みと再生への希望を共有することも可能となる。すなわちモリソンは、誰もが共有できる世界を「身体」「自然」「心」、そして過去、現在、未来といった「時間」さえも有機的に結ぶ、含意に充ちた言語を用いて構築している。モリスンの小説言語は、作品世界のダイナミズムを生み出し、華麗で豊饒な文学世界を作り上げる源となっているのである。

## 論文審査結果の要旨

本論文の目的は、トニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-) の小説における身体描写と自然描写に着目し、その表象の意味と機能を分析することによって、モリスンの小説言語の特徴を明らかにし、小説の多義性や重層性を検証することである。

第一章第一節では、『ソロモンの歌』 (*Song of Solomon*, 1977) を取り上げている。「黒い大きな木」を思わせ、いつも樹木の匂いを発しているパイロット (Pilate) と爪が長く羊毛のような髪の毛をもつヘイガー (Hagar) に焦点を絞り、二人の身体的特徴を分析することによって、彼女達が主人公ミルクマン (Milkman) の成長に対して果たした役割を検証している。第二節では、ミルクマンのアメリカ南部への旅を通して、自然との直接的触れ合いにより、ミルクマンが段階的に中産階級的価値観や物質主義を振り落とし、自己認識に達し、全体性を獲得していく様子を丁寧に跡付けている。

第二章では、1970年代のアメリカ合衆国、西インド諸島を舞台にした『タール・ベイビー』 (*Tar Baby*, 1981) を取り上げている。第一節では、サバンナのような額と森林の声をもち、アフリカの美に溢れる主人公サン (Son) の身体描写に着目し、ヨーロッパ人のように振る舞うアフリカ系アメリカ人のジャディー (Jadine) が、サンとの関わりの中で自己認識に至る過程を考察している。第二節では『タール・ベイビー』における自然の機能を論じている。この作品において、擬人化された自然が物語の進行役としてギリシア劇のコロスのような役割を果たしていることを指摘し、次いでヴァレリアン (Valerian)、サン、ジャディーなど人種、階級、性などが異なる登場人物を通して、自然と人間の多様な関係を分析している。

第三章と第四章は、奴隷とされた人々の人間性の回復を描いた『ベラヴィッド』 (*Beloved*, 1987) を取り上げている。第三章では、エイミー (Amy) とベラヴィッド (Beloved) の身体描写に焦点を絞り、今まであまり注目されることのなかったエイミーの腕、手、髪のもつ意義を小説全体のテーマと絡めて分析し、エイミーの「癒す女」としての姿を見事に浮き彫りにしている。続いて第二節では、謎の女性ベラヴィッドの身体性をバフチン (Mikhail Bakhtin) の理論を援用しながら分析し、「グロテスクな存在」であることを検証している。『ベラヴィッド』における自然」と題された第四章は三節に分かれており、第一節ではハチドリ、雄鳥、カーディナルなどの鳥、第二節では運河、井戸水、雨水、羊水などの水、そして第三節ではツゲの木、スズカケ、桑の木、チョークチェリーの木などの樹木の意味と機能が考察されている。鳥、水、樹木の豊かなイメージは、作品全体を彩りながら、物語の展開と登場人物の精神のありようにきわめて密接に関わっていることが指摘されている。

以上、これまであまり包括的には考察されることのなかった身体描写と自然描写に焦点を当てて、モリスンのテキストを緻密に分析し、小説のもつ重層性を探った本論文は、きわめて意義あるものと言える。先行研究に対する目配りも行き届いており、論旨は明快で説得性がある。ときに、『イメージ・シンボル事典』に依拠しすぎるあまり分析がやや恣意的に流れるきらいがあり、またモリスン文学の重層性を検証する試みも不十分な点が多少見受けられるが、論文全体の価値を損なうものではないと判断される。ともあれ、本論文は、論考の優れた成果においても、また論述の手堅さにおいても、論文提出者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。